

今泉直美「地方の小都市におけるコンパクトシティ化について」

日本におけるコンパクトシティ化は、青森市と富山市の例が代表的ですが、大都市ではなく町におけるコンパクトシティ化についてはほとんど議論されてきませんでした。

しかし、国土交通省による立地適正化計画制度はコンパクトシティ化を全国に普及させる構想であり、その対象には大都市だけでなく小都市や町も含まれています。

筆者は、故郷である群馬県明和町という人口 1 万人強の小規模な町を事例に取り上げました。単に土地の事情に詳しいからという理由ではなく、この町が国土交通省の立地適正化計画に加わっており、国の補助金を活用してコンパクトシティ化を進めている、数少ない町の一つだったからなのです。

ところが、実際に国の補助金を活用した事業は、コンパクトシティの理念とは裏腹なことを進めていたこと、また、そもそもこの町ではコンパクトシティ化を進める必要性があまりなかったことが、調べるうちに明らかになってきました。

ここでは、コンパクトシティの理念そのものが間違っていると言いたいわけではありませんし、誰かを非難したいわけでもありません。理念と現実の矛盾は貴重な発見であり、それにより、なぜこうした矛盾が生じてしまうのか、住民にとって本当に必要な政策は何だったのかを気づかせてくれるのです。コンパクトシティの教科書を読んでいるだけでは、決して得られない教訓です。

筆者は、コンパクトシティの理念と、住民にとっての必要性を考慮した末、明和町東部の公共交通空白地域に住む高齢者（交通弱者）を主な対象とするオンデマンド交通のバスを、現実的な解決策として提案しており、なかなかよく考えられていると思います。